

2015年3月4日

国土交通省九州地方整備局長 金尾 健司様
熊本県知事 蒲島 郁夫様

自然の恵みが豊かな球磨川水系の再生と 流域の防災の安全対策に関する意見書

子守唄の里・五木を育む清流川辺川を守る県民の会 代表 中島 康
清流球磨川・川辺川を未来に手渡す流域郡市民の会共同代表 緒方俊一郎
岐部 明廣

はじめに

6年間に及ぶ「ダムによらない治水を検討する場」も、「地域の宝」である球磨川においてローカルな価値観を反映した川づくりという歌い文句とは裏腹に、捏造された数値による水害発生シミュレーションで終わってしまい、大きな期待を寄せていた流域住民をがっかりさせるのでしかなかった。

それは、「検討する場」開催当初に住民が提出した「自然の営みを重視した総合治水対策」を超えるような議論は何一つされることはなかったし、また、最終段階においては、人吉の治水安全度は1/5～1/10しかないという実証性の全くない数値を持ち出してしまったことに端的にあらわれている。しかも、この治水安全度は法で規定されている内容から大きく逸脱してしまったものでしかない。

このようなお粗末な内容で「検討する場」を終りにして、新しいステージで何を議論しようというのであろうか。私たちは、次の3点を柱にした議論をすべきである、と考えている。

【I】 自然の恵みが豊かな球磨川の再生に関する意見

自然の恵みが豊かな球磨川を再生させるには二つの側面から考えなければならない。一つは球磨川そのものであり、もう一つは球磨川を育んでいる流域である。

流域住民は暮らしの中で、川に何が持ち込まれることによって、球磨川が破壊されていたかを見届けている。また、流域にどのような開発が持ち込まれたときに球磨川が破壊されていたかも見届けている。

(1) 川に持ち込まれた建造物を取り除き、川に大きな自由を持たせること

球磨川が豊かな川であるか、ないかを知る手掛かりはいろいろあるが、一番重要な手掛かりはウナギやアユが川と海を自由に行き来できる川かどうかである。

そのためには、すでに川に持ち込んだ建造物を撤去することである。平成7年に開催さ

れた川辺川ダム審議会においては「市房ダム建設後の下流域の多良木エリアにおいてはアユが姿を消した」という報告がなされている。平成 22 年には、九地整が「球磨川ダム水環境改善事業一事後評価資料」の中で「ダムが撤去されることになればアユをはじめとする魚類等の生息環境は良好なものとなる」と述べている。

ダム撤去は川の再生にとって最も重要な課題である。当面は、荒瀬ダム撤去に続くダムは瀬戸石ダムということになる。昔、人々は「猿飛びの瀬から本物の球磨川は始まる」と言っていたほど、球磨川の中流域は日本を代表する中流域なのである。地域活性化においても瀬戸石ダム撤去は欠かせないものである。

(2) 全流域それぞれの特性に対応した保水力の向上を

流域の多くの人々が「昔は、もっと水量があった」「こんな水の無い球磨川はかわいそうで見とれない」といった事を口にする。確かに、昔の球磨川を見ると球磨川の水はいまよりはるかに豊富である。

何故、水流が減ってしまったのか。それは、奥山を含め、全流域の開発が流域の保水力を奪ってしまったからである。流域のどんなところがどんな開発によって大地の保水力を破壊したのかを克明に調査し、それに基づく対策を立てることが重要である。



山の保水力を高めても、山の保水力は破壊されている

これは、次に述べる防災とも深く関連しているが、ここでは流域の開発が保水力を破壊し、球磨川の水量を奪い取ってしまっている問題だけに留めておく。

【2】 防災の安全性を高める対策に関する意見

私たち流域住民にとって大切なことは洪水を川とダムに閉じ込める治水の安全度（治水の規模を示す目安）を高めることではない。ダム放流や決壊はダムの下流域に甚大な災害を引き起こすし、堤防決壊もその周辺に甚大な災害を発生させるからだ。

その証拠に、人吉市に水害を発生させるシミュレーションの前提事項に「越流すると堤防は決壊する」「越流しなくても堤防は決壊する」を上げていた。「治水の安全度は流域の住民の命を守る防災とは無縁のものだよ」と国交省自らが告白しているのだ。

中流域においては、ダムで流れを止めることそのものが大きな水害を発生させる要因になった。荒瀬ダム・瀬戸石ダムそのものが流域を水害常襲地帯と変えてしまった。だから、荒瀬ダムに続き、瀬戸石ダム撤去は中流域の防災にとっても欠かせない重要な課題となる。

ダムの放流や堤防の決壊は急激な増水を引き起こすために避難をする余裕を奪い、甚大な災害となることは過去の球磨川や周辺の川の水害を通して住民は認識している。だから、

住民は堤防や特殊堤が決壊しないものに改修されることを強く求めている。これに関しては、もはや議論する余地はない。直ちに、実施するのみである。

もう一つ、球磨川流域の災害史が語っているように、球磨川流域は地質学的に山地崩壊の激しいところであるということだ。遠くは、瀬戸石崩れがあり、近くは、昭和38年・昭和39年に球磨川流域の至る所で発生した山地崩壊があり、多くの死者を出した。

ところで、近年においてはさらに大きな問題が起きている。地球温暖化に伴い、球磨川流域においては1時間に50mmから100mm前後の局所的集中豪雨がごく普通に降るようになってきていることだ。

この局所的集中豪雨が流域に何をもたらすかは、2012年7月12日の球磨川流域の局所的集中豪雨が流域にどのような災害を発生させるかを見せつけてくれた。

これこそが、検討する場で取り扱わなければならない課題であったが蚊帳の外においてしまった。2012年7月12日の雨は九州北部豪雨と呼ばれており、阿蘇ではあちこちで1時間に100mmの局所的豪雨が2時間も3時間も降り続き、阿蘇の山を総崩れさせてしまった。砂防ダムも簡単に突き崩していた。砂防ダムの安全神話など何処にもないのだ。

このような豪雨は九州南部に発生してもおかしくない。現実には発生している現象にどう対処するかを考えるのが防災の基本である。これから新しくスタートさせる会議では是非この問題を議論の中心に据えるべきである。

【3】 昭和40年人吉大洪水の取り上げ方に関する意見

昭和40年洪水を再び取り上げて議論を進めるとのことであるが、そうであれば、この昭和40年洪水が引き起こした人吉大洪水は国・県の治水対策の大きな誤りが引き起こしたことをきちんと検証することでなければならない。この検証を抜きにして、昭和40年洪水を取り上げる必然性はどこにもない。

人吉市より上流の球磨川の河川改修を市房ダムとセットで進行させ、かつては氾濫常襲地帯であったところを無くしてしまった。ところが、人吉市の球磨川は未改修のまま放置していた。2500m³/sしか流れないエリアの存在を無視してしまっていたのだ。

人吉市の球磨川は昭和41年～昭和56年にかけて河川改修を実施した。亀が淵地区の住民を立ち退かせ、大幅に川幅を拡張した。この時、亀が淵の住民の方たちには、この部分を川にすれば、二度と人吉には水害は発生しないと国と県が一緒になって説得を繰り返していたのだ。そして、昭和57年に戦後最大の洪水が発生したが大洪水は発生しなかった。この時、まだ実施すべき河川改修は中途のままの状態であったが、それでも水害は発生しなかった。《註》 誤った治水対策で発生した水害を基に水害発生シミュレーションしても

そのシミュレーションには科学的根拠もなく、防災対策には役立たない。

驚くことに、この未改修の部分はいまなお放置したままなのだ。にもかかわらず、人吉の安全度は低いなどと無責任な発言を繰り返し、住民が要望している河川改修も無視し続けている。無駄な会議は止め、いま直ぐにやらなくてはならない河川改修に取り組むべきである。

以上